

氏名(国籍)	ロテム コーネル (イスラエル)		
学位の種類	博士(心理学)		
学位記番号	博甲第1,316号		
学位授与年月日	平成7年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当		
審査研究科	心理学研究科		
学位論文題目	Facial asymmetry in normal people : Its perception, attribution, and effect on attractiveness judgment. (顔の非対称性の知覚に関する心理学的研究：その人格、情緒及び魅力の判断におよぼす影響)		
主査	筑波大学教授	医学博士	佐々木 雄 二
副査	筑波大学教授	学術博士	菊 地 正
副査	筑波大学助教授	医学博士	小 川 俊 樹
副査	筑波大学助教授	博士(心理学)	吉 田 茂

論 文 の 要 旨

(1) 本論文の構成

本論文は4部から構成されており、本文11章、222頁、文献40頁、付録26頁となっている。

(2) 本論文の内容

本研究は、顔が人間関係に与える心理的影響の重要性を取り上げ、とりわけ顔の非対称性を持つ心理的特質について明らかにすることを意図して行われた。すなわち、I部1章では本研究の目的が問題の所在という形で提起されており、①顔の左右いずれの半側が感情表出と深く結びついているか、②顔の非対称性が感情表出に及ぼす影響とその性質について、③顔の非対称性と魅力との関係という3点について明らかにしようとする実験的研究である。

II部2章から6章までは文献研究に当てられている。すなわち、顔が対人関係やコミュニケーションに大きな役割を果たしている身体器官であること、人は他人の表情からかなり正確に感情を読み取れること、そして先行研究では顔の左半分が感情の判断を左右しがちなこと。また、顔が人の魅力の判断に際して、身体他の器官よりも決定的であること、生物学では身体の非対称性(bodily fluctuating asymmetry)という概念が提出され、この概念によって魅力を説明しようとして試みられていること、そして顔の非対称性が能動的な感情の表出の場合により決定因として働くことなどが、広範囲にわたる文献の渉獵を通して明らかにされた。そして、7章では、これらの先行研究の成果をもとに、顔の左右、いずれが情緒や人格の判断にどのような影響を与えているかに関して5つの仮説が、顔の

非対称性と情緒や人格の判断との関係に関して2つの仮説が、そして顔の美しさ、魅力と顔の対称性との関係に関して6つの仮説が提起されている。

Ⅲ部8章から11章までが実験研究に当てられており、7章で提出された13の仮説を検討している。8章では6つの実験が行われ、①の表情のない顔（resting face）の左半分に対する情緒や人格の判断と右半分に対するそれとの間には差はない、②右利きの人の顔でも左利きの人の顔でも、表情のない顔の判断では左右差はない、③男女間でも、④日本人と非日本人の間でも、表情のない顔の判断では左右差は認められない。しかし、⑤笑っているという表情のある顔（posed face）では左半分が右半分よりも感情を表しているという仮説が支持された。9章では、①表情のない顔では対称性のある合成顔が非対称性の自然な顔よりも肯定的に評価され、②表情のある顔では対称性のある合成された顔と非対称性の自然な顔との間に評価の差はないという仮説に基づいて、3つの実験が実施された。その結果、表情のない顔でも、要求されて作った笑顔でも対称的な合成して作られた顔と自然な顔との間には有意な差は見い出せなかった。ただ、大きな方の半分で作られた顔が小さな方の半分で作られた顔よりも肯定的に評価されなかったが、これは小さな顔の方が好ましいとする文化の違いによるものと考えられた。10章では、①表情のない顔では対称性のある顔と非対称性の顔との間には魅力という点では差はないが、②中年以降、加齢にもなって顔の対称性が魅力の評価の重要な要因として働き、③老人の表情のない顔では対称性のある合成して作られた顔は非対称性のある自然な顔よりも若く見える。そして、④表情のある顔では非対称性の自然な顔が対称性のある合成された顔よりも魅力的と評価されるものの、⑤表情のない顔では顔の魅力の評価と顔の対称性・非対称性とは独立していて、⑥一般成人の非対称性のある顔が対称性のある合成された顔よりも自然な顔と判断されやすいという6つの仮説が、4つの実験から支持された。

以上、本研究では、今世紀初頭から写真や絵画を用いて研究されてきた顔の左右差が情緒や人格の判断に与える影響について、コンピュータを用いた精微な実験研究の結果、表情のない顔では従来指摘されてきた人間の顔の左半分と右半分の違いは認められず、表情のある顔でのみ左半分が、すなわち大脳右半球の働きが感情表出に強く関与しており、人間においては、動物での研究と違って、対称性が魅力とは一義的には関連がないことが明らかにされた（11章）。

審 査 の 要 旨

従来、写真や絵画を用いて、人の情緒や人格の評価に果たす顔の役割について多くの研究がなされてきた。そして、顔の左半分が感情の表出に強く関与していることが精神分析学理論を援用して唱えられてきたが、本研究では近年発達したコンピュータ技術を援用して従来よりも正確な対称性のある合成された顔を作ることによって、先行研究に伴う隘路を避けた実験研究に成功している。また、顔の左右差に関する大脳生理学的知見を基に、被験者側の要因として利き腕など大脳半球の機能差をも考慮した精微をつくした実験デザインにもとづいて、顔の魅力という現実的な要請の強い問題に一定の解答を与えている。

しかしながら、パラメータが7段階の形容詞対であり、もっと細かなパラメータを採用することによって情緒の判断を豊かにすることが出来るのではないか、さらに顔を刺激として捉えて、より刺激要素としての分析を行った上で刺激－反応という関係から情緒や人格の判断を分析できるのではないかなどの難点がないわけではない。しかし、これらの問題点は本研究から発展すべきものであり、今後の残された課題といえる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。